６月 第３号
令和６年７月２日

すずしろ

～開拓・発展・完成～

開進第四中学校だより
校 長　田邊克宣

『 他者への関心をもつ 』

今年は梅雨入りが遅い一方で、週末ごとに雨模様の天候となり、また、すでに猛暑の日もあります。新型コロナも散発的に発生しており、体調管理には細心の注意を払いながら、健康第一で過ごしていきましょう。

さて、７／１の朝礼で、「 よっちぼっち 」（暮しの手帖社）という本を紹介しました。装丁から素敵なこの本は、カメラマンである著者の撮った写真が随所に差し挟まれ、そこからやさしい息吹が伝わってきます。言葉を丁寧に紡いだ文章からは、人間味が溢れ、そしてほっこりとした温かさが立ちのぼってくるような、そんな一冊です。

この本を出版した齋藤陽道氏は、耳が聞こえません。

今年の４月、新年度が始まってすぐの頃、一人の３年生と雑談をしていました。

その時、ふと、その生徒が、「 耳の聞こえない人って、自分のことを考える時、何て言うんだろう。」とつぶやきました。思わず「 え。」と聞き返すと、「 だって私なら自分のことを考えるとき、『 ワタシ 』と言うけれど、耳の聞こえない人はどうするのかなって。」

この言葉を聞いた時、とても大切なことだな、と感じました。

日本では、いわゆるろう者の人たちは、主に「 日本手話 」を使っています。この言葉は独自の文法構造をもち、単なる身振りではなく、音声言語と対等の言語として、およそ３２万人の人が使用しています。

そして、先述した齋藤氏による著述が示すように、日本手話と日本語の両方を使うことができれば、れっきとしたバイリンガルとなるのです。

来年には、日本で初めて「 デフリンピック 」が開催されます。１９２４年の第１回パリ大会から１００年の歴史ある大会で、今から楽しみですが、現実社会では、耳が聞こえないことは外見からは判断しにくく、例えば震災時などに必要な情報が分からないという状況が生じてしまうというようなこともあるそうです。

一人一人の存在を大切に、そして互いに多様性を認め合うことができる世界の実現のためには、自分以外の全ての他者に対する関心をもつことが大切である。そのことを改めて感じさせられた、先の生徒の一言です。